



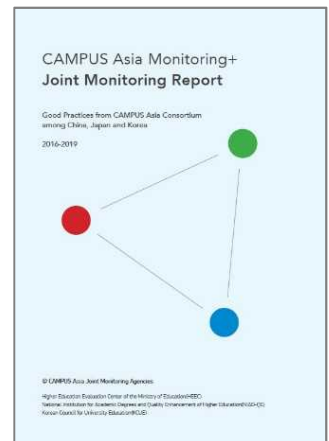
「キャンパス・アジア」モニタリング+ 共同モニタリング報告書 概要



はじめに

2018年より日中韓三カ国の質保証機関は、「キャンパス・アジア」の国際共同教育プログラムに対する質保証活動である「モニタリング+(プラス)」を共同で実施しました。

その目的は、国際共同教育プログラムの「保証すべき質」を明確にして、優良事例を抽出することであり、2019年12月には、諸調査を通じてプログラムに求められる質的要素や優良事例等をまとめた報告書「CAMPUS Asia Monitoring+ Joint Monitoring Report」(英語)を刊行しました。



「キャンパス・アジア」とは？

「キャンパス・アジア」は、2010年に日中韓三カ国の政府により立ち上げられた、質の保証を伴った大学間交流を推進するための構想です。

学部では1 Semester以上、大学院ではダブル・ディグリーを実施する交流が推奨され、分野は問わず、派遣・受入のバランスのとれた学生交流を基本的な枠組み(実施期間は5年間)としています。

2011年からは、日中韓の大学コンソーシアムによる10件の国際共同教育プログラムが試験的に実施されました。その実績が認められ、2016年からは本格実施段階として、17件^(※)(継続8件、新規9件)のプログラムが開始されました。

^(※) 日本側は、平成28年度大学の世界展開力強化事業のタイプA「キャンパス・アジア(CA)事業の推進」として採択。

モニタリング+の実施概要

大学改革支援・学位授与機構は、2011年より、中国教育部高等教育教学評価センター(HEEC)、韓国大学教育協議会(KCUE)と共同で「キャンパス・アジア」における質保証プロセスを構築し、パイロットプログラムに対するモニタリングを2013年と2015年の2度実施しました。その経験を基に、2017年には、モニタリングのための日中韓共同ガイドライン「Joint Guidelines for Monitoring International Cooperative Academic Programs in CAMPUS Asia」(以下、「ガイドライン」)を策定しました。

今回のモニタリング+は、2016年から新規採択された9件のプログラムを対象に、各質保証機関が3コンソーシアムずつ分担して、ガイドラインの実施枠組(基準、体制、方法)に基づき、プログラムの実施開始3年目(実施期間は5年)に当たる2018年から2019年にかけて実施しました。

具体的には、日中韓各国の有識者で構成される共同モニタリング委員会・部会の下、コンソーシアムが作成した自己評価書に基づき、同部会委員が書面調査、訪問調査を行い、同委員会にてモニタリング結果を決定しました。

本概要では、報告書に編纂されている優良事例等の一部を紹介します。

● モニタリング+を通じて得られた優良事例

ダブル・ディグリープログラムなど、国際共同教育プログラムの状況を把握し、その質を向上させるための基準とは何でしょうか。モニタリング+では、以下の5つを基準とし、「キャンパス・アジア」プログラムの多数の優良事例を得ることができました。



27件 基準1 目的と実施

25件 基準2 教育プログラムの共同開発

24件 基準3 学生支援

18件 基準4 共同プログラムの付加価値(成果)

10件 基準5 継続的な質の向上

● どのような優良事例があるか？

104件の優良事例は、以下のキーワードにまとめられます。

プログラムの設計・実施
における連携

各大学の特徴や共同性を
考慮したカリキュラム

短期プログラム・セミナー

相互理解と学習成果向上
の取組(語学・文化学習、
アクティブ・ラーニング等)

国際対応能力の高い
教職員の配置

参加大学横断型FD活動

基準2

統一的な入学選抜方法

学生リクルーティングの
ための広報

長期留学への動機付けの
工夫

留学前の学生支援

留学先の学習情報の
事前伝達

留学中の学生支援

学生相互の支援体制
(TA、同窓会等)

基準3

学生の満足度・達成度
調査の実施・分析

学生の留学レポート・成果
物を通じた学習成果把握

学術論文を通じた学習
成果把握

単位互換の事前調整と
基盤づくり

単位互換システムの
共同策定

プログラム修了証の発行

ダブル・ディグリー授与
方針の策定

基準4

独自のプログラム目的の
共同設定

期待される学習成果の
明示と共有

構成員との目的共有
(合意文書、定期会合等)

プログラム目的と全学的
国際戦略の連動

基準1

実施体制の明文化
(協定書、ガイドライン等)

効果的な運営体制

効果的な実務体制
(コーディネーター等)

参加大学間の
円滑な連絡調整手段

効果的な学内協力体制

参加大学共同の自己点検

外部評価

プログラム情報の発信

プログラムの持続可能性の
ための取組

基準5

モニタリング+を通じて得られた 「キャンパス・アジア」プログラムの優良事例

基準1 目的と実施

■ 目的設定と共有

優れたプログラムに向けて： 海外の大学と共同教育プログラムが成功を収めるには、国際協働の目的や養成する人材像を参加大学間で熟慮の上、プログラムの目的・ビジョンを明確に定めることが不可欠です。その目的は、プログラムのすべての構成員の共通認識とし、自大学の国際戦略と連動させることも重要です。目的・ビジョンの実現に向けては、中期または短期的な目標を設定し、実行することが求められます。

結果の総括： モニタリングを実施したプログラムでは、各参加大学の特徴・強みを寄せ集めて、独自性のある目的を設定している事例が多数みられました。これらの目的は、協定書等の書面、あるいは参加大学間の定期会合といった様々な機会を利用して共有されています。また、全学的な国際戦略と整合の取れたプログラムの目的を設定している事例も確認されました。

優良事例の一例：

期待される
学習成果の
明示と共有

世界的な少子高齢化における公衆衛生・医療の適切な対応の必要性を踏まえ、特にアジアの社会の変容に対して幅広い国際感覚を備えたリーダーの育成を、プログラムの喫緊の使命と位置付けている。

構成員との目的
共有(合意文書、
定期会合等)

教員の国際会議、年次の国際シンポジウムをはじめ、様々な機会を通じてプログラムの目的について累次議論を重ねることで、参加大学間でプログラムの目的に対する共通理解を深めている。

■ 実施体制

優れたプログラムに向けて： 国際共同教育プログラムの目的達成に向けては、実施体制が適切に整備され機能することが不可欠です。プログラムのガバナンス、学生に対する責任、財政面の役割分担といった基本方針が参加大学間で十分協議され、明文化されていることも重要です。実務面では、日々の諸問題に参加大学間で協働して対処するため、コーディネーターをはじめとする実務体制と円滑な連絡体制の整備が欠かせません。各学内では関係部署との連携、そして必要な科目を用意するために他の教員の協力も重要となります。

結果の総括： 「キャンパス・アジア」の各プログラムでは、意思決定組織を設置し、参加大学間で課題を協議しプロセスを共有する体制が整備されています。また、運営をつかさどるプログラム・コーディネーターが各大学に配置され、学生、教職員、他部署との日々の調整を担う事例が多くみられました。学内の関係部署と連携し、プログラムの効率的な運営を図る事例も確認されました。

優良事例の一例：

実施体制の
明文化(協定書、
ガイドライン等)

プログラムの中長期の目的・目標に向けて必要な枠組を明文化するため、覚書をはじめ、単位互換に関するガイドライン、ダブル・ディグリー協定書、ラーニング・アグリーメント等を参加大学間で締結。

効果的な
運営体制

参加大学間で様々な課題を協議するためのプラットフォームとして、コンソーシアムにプログラム委員会を設置。さらに、各大学内にもプログラム委員会を設置し、連携体制を整備。学内からの協力を得やすくするため、同委員会を国際担当副学長直下に位置付けている大学もある。

モニタリング+を通じて得られた 「キャンパス・アジア」プログラムの優良事例

基準2 教育プログラムの共同開発

■ カリキュラムの統合

優れたプログラムに向けて：カリキュラムについては、各参加大学の特徴や強みを集結し、国際共同教育プログラムならではの付加価値を生み出すとともに、個々の授業・活動が一つのプログラムとしての一貫性を備えたものであることが重要です。カリキュラムの共同開発には、多くの労力を要しますが、教育効果の高い、プログラムを象徴するものとなることが期待されます。教授方法についても、日中韓の学生がカリキュラムの中で協働し、高い学習成果をもたらされるような、学生中心の教授が行われることが望まれます。

結果の総括：「キャンパス・アジア」プログラムには、大学のネットワークの強みを活かした産学官連携による実践的な科目や、アクティブ・ラーニングの手法を積極的に採り入れた授業など、カリキュラムへの様々な工夫がみられました。また、各プログラムでは、日中韓の学生が互いの文化や言語を深く学ぶための取組が実施されています。

優良事例の一例：

各大学の特徴や
共同性を考慮し
たカリキュラム

産学連携のプログラムであるPBL(Project Based Learning)ワークショップは、学生がグローバル企業・団体等の実務家から実践的知識を習得する機会として、先進的なプログラムとなっている。

短期プログラ
ム・セミナー

サマー/ウィンタープログラムの参加学生は、3週間のプログラム期間内に日中韓三カ国の大学を訪れ、講義、グループワーク、フィールドトリップ、語学研修等に参加。短期プログラムの参加が、より長期の留学への動機付けとなることが意図されている。

■ アカデミックスタッフ・教育

優れたプログラムに向けて：国際共同教育プログラムでは、プログラムの目的と教育内容を踏まえ、国際対応能力や専門性の高い教員の存在が不可欠です。これらの教員に対しては、プログラムへの持続的かつ積極的な参画を促すための支援や、FD活動など能力開発面での支援を整備することが重要です。

結果の総括：「キャンパス・アジア」の各プログラムでは、プログラム内容に対応できる教員陣を確保するとともに、多言語が話せて、プログラムの調整を担うプログラム・コーディネーターが配置されていました。また、最新の教授法に関する日中韓合同研修や、参加大学間の教員交流等、国際共同教育に携わる教員の能力開発の事例がみられました。

優良事例の一例：

国際対応能力
の高い教職員
の配置

各参加大学に「キャンパス・アジア事務局」を設置し、英語・日本語・中国語・韓国語の4言語でのコミュニケーションが対応可能な体制を整備。

参加大学横断
型FD活動

学生のスプリングセミナー引率のために来日した機会を利用して、日中韓の参加大学教職員が合同で、アクティブ・ラーニングやPBLの手法を研究するとともに、教授法の改善に向けた議論を実施。

モニタリング+を通じて得られた 「キャンパス・アジア」プログラムの優良事例

基準3 学生支援

■ 参加学生の募集

優れたプログラムに向けて： 国際共同教育プログラムの参加学生の募集に当たっては、プログラムの目的や教育内容を踏まえて学生選抜基準・方法を参加大学間で協議し、明確に定めることが重要です。プログラムの内容や学生募集に関する情報は、ウェブサイトやパンフレットのほか、シンポジウム等の公開行事の活用など、様々な手段が考えられます。また、プログラム未参加の学生の参加促進はもとより、参加中の学生に対してプログラムの上位課程への進学等の参加意欲を高める方法を講じることも重要な視点です。

結果の総括： 参加大学間で選抜プロセスを熟慮の上、コンソーシアム共通の申請様式、選抜基準を整備した事例が複数確認されました。多くのプログラムで、リーフレットや公開シンポジウムといった様々な手段を組み合わせることで募集がなされています。あるプログラムでは、短期プログラムを戦略的に活用し、長期留学への動機付けとしている工夫を盛り込んだ事例もみられました。

優良事例の一例：

学生リクルー
ティングのため
の広報

公開セミナー開催が学生リクルーティングの導入として機能。セミナーをシリーズ化し、当該分野の様々な専門家が登壇してキャリアパスの具体例を学生に提供することで、継続的にプログラム参加への魅力を発信している。

長期留学への
動機付けの
工夫

学部4年生を対象とするサマープログラムにおいて、大学院の授業の受講(単位を付与)や研究所訪問の機会を提供。これにより、学生の大学院プログラムへの参加意欲を高め、早くから研究準備に取り掛かる動機付けとなることが意図されている。

■ 学習・生活支援

優れたプログラムに向けて： プログラムに参加する受入・派遣双方の学生に対する学習・生活支援は、プログラム参加前の準備、参加中、参加後のそれぞれの段階で様々な形で提供されることになります。そのため、参加の各段階において、誰にどのような種類の支援が必要となるか、参加大学間で認識を擦り合わせの上、適切な責任分担の下で実施することが不可欠です。

結果の総括： 各プログラムでは、日常生活を含めた参加学生の留学経験が充実したものとなるよう、学習・生活支援に対して入念に取り組まれている状況が確認されました。同窓会活動は、プログラム修了生だけでなく参加中の学生も巻き込み、「キャンパス・アジア学生」としての意識醸成を図る上で重要な役割を果たしています。また、学生が相互に支援し合う体制として、TA等を務める参加学生の意見をプログラム運営に取り込む仕組みが設けられ、学生と教職員の間のコミュニケーションのギャップを埋める役割を果たすといった特徴的な事例もみられました。

優良事例の一例：

留学先の学習
情報の事前伝達

学生の留学先での科目選択を支援するため、各大学のプログラムの主要教員により、コースカタログや期待される学習量といった学習情報が整理されている。

学生相互の支
援体制(TA、
同窓会等)

大学が、長期留学を修了した学生を『キャンパス・アジア』アンバサダーに任命。アンバサダーは明確な役割意識を持って、参加中の学生だけでなく未参加学生に対して長期留学経験を伝えるなど、様々な活動に参画している。

モニタリング+を通じて得られた 「キャンパス・アジア」プログラムの優良事例

基準4 共同教育プログラムの付加価値(成果)

■ 学生の満足度

優れたプログラムに向けて：プログラムでは、当初に設定した育成する人材像に基づき、参加学生の学習成果(知識・スキル・態度等)を測定するための適切な方法を構築し、継続的に測定することが重要です。その方法は、参加大学間で協議の上、統一的な測定方法であることが望まれます。さらに、プログラム修了生の進路や成果を継続的に追跡することも重要です。

結果の総括：各プログラムでは、学生の満足度調査、達成度調査、留学後のプレゼンテーション、論文発表など、多様な方法を適切に組み合わせ、学習成果を測定していることが確認できました。それらの測定結果は参加大学間で共有の上、分析が行われています。

優良事例の一例：

学生の満足度・
達成度調査の
実施・分析

カリキュラムの質を客観的な情報に基づき検証するため、留学修了生に対して留学中の学習時間の詳細(授業、予復習、指導等の実時間)と学習時間に対する満足度を問うアンケートを参加大学の共通様式で実施。回答結果は参加大学間で共有し、授業改善に活用することを狙っている。

学生の満足度・
達成度調査の
実施・分析

ワークショップ終了直後に実施する学生満足度アンケートでは、修学中の学習環境、学習意欲、学習成果の3つの側面から満足度を測定するとともに、学生の意見を収集し、その結果をプログラムの改善、今後の計画に活用している。

■ 単位互換・学位の授与

優れたプログラムに向けて：単位互換の仕組みづくりに当たっては、各大学(国)の単位制度について理解を深めた上で、教育内容やその水準に留意しながら、参加大学間で単位互換の基礎づくりに協働して取り組むことが不可欠です。修了に必要な科目の一部を相手大学で履修するというダブル・ディグリープログラムの場合、必修科目、選択科目等を関係大学間で事前に入念に擦り合わせた上で、円滑な単位互換の仕組みを整えておくことが求められます。成績評価についても同様に、各大学の成績評価の仕組みを十分に把握した上で、留学先で取得してきた成績を円滑に認定するためのシステムが重要となります。また、ダブル・ディグリープログラムでは、学位授与の方針及び審査方法を参加大学間で十分に協議して定めることが必要です。

結果の総括：単位互換の仕組みの検討に当たり、あるプログラムでは欧州の国際共同教育プログラムにおける先行事例を研究し、日中韓版の単位互換ガイドラインの策定に至った事例がみられました。ダブル・ディグリープログラムについては、プログラムが開設済であったり、構築段階であるなど、進展状況はコンソーシアムにより様々ですが、ダブル・ディグリーに必要な仕組みを参加大学間で確認し協議を重ねながら、運営または開設準備に取り組んでいることが確認されました。

優良事例の一例：

単位互換
システムの
共同策定

参加大学間での学生交流協定の締結に加え、学習量に基づく共通の単位の定義をまとめた公式のガイドラインを整備。参加大学間の合意に基づき、派遣先大学で取得した単位を所属大学の単位として認定。

プログラム
修了証の発行

所属大学及び派遣先大学において、プログラムにおける所定の単位を修得した学生に対して、大学卒業時に、プログラム修了証を参加大学共同で授与。

モニタリング+を通じて得られた 「キャンパス・アジア」プログラムの優良事例

基準5 継続的な質の向上

優れたプログラムに向けて：国際共同教育プログラムの質保証を実現することは、この種のプログラムの成否の鍵の一つであるといえます。そのため、体系的で継続性のある質保証システムを参加大学間で十分協議し、協働して構築することが重要です。また、プログラムの状況に関する情報、特に教育内容やその成果を社会へ広く発信することは、プログラムに対する認知と理解を得ていく上で重要な手段です。その取組は、新たな学生の参加を確保する上でも重要です。プログラムの持続的運営の観点では、財政面を含めたプログラムの持続可能性を担保するための方策を参加大学間で練っておくことが望まれます。

総括：「キャンパス・アジア」の各プログラムでは、プログラムのレビューを実施し、その結果を分析の上、改善に反映したり、参加大学合同の委員会でプログラムの質の向上のための議論が定期的に行われていることが確認されました。また、政府による財政支援終了後のプログラムの継続・発展について議論が進められ、なかには自主財源の確保に至っている事例もみられました。

優良事例の一例：

参加大学共同
の自己点検

毎年開催するワークショップの機会を活かし、キャンパス・アジアの教員会議を実施。特定の課題解決に向けた協議や、運営の効率化、教育効果の向上のため、プログラム成果のレビューが行われている。

参加大学共同
の自己点検

プログラムの質保証委員会を立ち上げ、参加大学がそれぞれの自己点検に活用できるようなチェックリストを開発。チェックリストでは、シラバスや試験の内容精査、教員や学生へのヒアリングを通じた、プログラムの目的適合性の評価を意図している。

外部評価

レビュー委員会に学生や、国際共同教育や国際的な質保証に知見をもつ国内外の外部有識者などが参画。レビューを通して得られた提言をプログラムの改善に役立てている。

プログラムの
持続可能性の
ための取組

プログラムがユネスコの認定プログラムとなったことで、今後プログラムへの参加が期待される学生等に対するより強力な訴求が可能に。さらに、企業や公的機関との連携が強化され、プログラムの充実・拡大に資することが期待される。

モニタリング+
資料掲載先
お問合せ

モニタリング+報告書電子版をはじめ、モニタリングの詳細は以下のウェブサイトをご覧ください。

http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/campusasia/

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構
評価事業部国際課

TEL : 042-307-1634, 1663

E-mail : ca-monitoring@niad.ac.jp